

高澤良一句集「ももすずめ」評

虫の素顔

土生 重次（「扉」主催）

一句の成ったよろこびは、日常の平凡なものから非凡を見出したときに生れてくる。非凡といっても特殊で唐突な事柄をいうのではない。見慣れたものが、新しい姿で限前に立ち現われてくるのを捉えることである。それが大野林火先生の指摘された「ひとふし」だと解釈している。句集名が『ももすずめ』というので、漢字を当てると「桃雀」か「百雀」と思っていた。鳥のことはまったく知識がないので、よく見る煤けた雀ではなく桃に似た雀でもいるのだろうかと思ったり、「百千鳥」の連想から、竹藪にでも群れている雀をいうのかと思っていた。ところが「あとがき」によると、蛾の幼虫だという。「スマートな肥り様は、吾がミニチュア版にして快なる哉」といつから、句集名にして「ひとふし」

がある。「僧帽弁閉鎖不全なる一病にみまわれ  
て」と「あとがき」にあり、「首回り、胴回りは、  
優にその適正寸法を越えた」とあるからには著  
者は相当の肥り型と思われる。差し出がまし  
いが、次の句集名は「ががんぼ」あたりが好まし  
いと思うが如何。

大あくび春の海より貰ひけり

大茅の輪仕上り風が先づくぐる

川下の方へほうたる木を替へて

くるぶしの上より刺せる秩父の蚊

葛餅に頁の耳を折りて立つ

さういへば家紋に似たる柿の蒂

なめくぢら砥石溶かしにかかりけり

身辺の些細な素材も、著者の手にかかると初め  
て見るもののように思わせられる。それは誰も  
が見たり経験していることであるが、これらの  
句を読む寸前まで読者のこころに眠っていたも  
のである。この眠りから醒めるのが感動なので  
ある。

そこに作者と読者の二ところが通い合う。「大あくび」という俗なるものと「春の海」の悠長でみやびやかなものとの対比がユニークである。

「貰ひけり」でさらに自然に向う人間の存在の小なることを思い、それが人間の逞しさにも通じてくる。以下の六句それぞれに、作者の着眼点が明快に打ち出されていて爽快である。いささかも曖昧さが無い。未消化の思いを観念的な言葉に頼るとか、只事を短詩型の力を借りてする思わせぶりが無い。

抽出句の中で特にたのしいのは、「くるぶし」という人間の体の部分でも骨の突き出たもつとも硬いはずのところを刺す「秩父の蚊」である。この蚊のイメージは、ふてぶてしい縞の模様を鎧っている。

また「なめくぢら」の句はどつだ。「砥石溶かしにかかりけり」である。こういわれてみると、自来也の墓、蛇丸の大蛇、綱手姫の蛞蝓の立川文庫の世界もまんざら嘘ではないように思えてくる。「なめくぢら」はきつと「砥石」を「溶かす」ほどの妖力が、あのねばねばした体液にもって

いると知らされる。ひよっとしたら、彼奴も秩父生れかもしれない。

著者独自の発想は、適確な表現力を得て新鮮な印象を愉しませてくれる。

また、本書の顕著な特色は、擬声語、凝態語を自由に駆使しているところにある。

十夜僧ずしんずしんと廊渡る

みつまたの荅おつとり日の射せる

啓蟄やずいと近寄るぶちの鯉

よろよるとじやがたらいもの花へ蝶

パリパリと揚がりズドンと花火了ふ

夕顔を天蛾ぶると発ちにけり

はつはつと山車倉の上に鴉鳴ける

コスモスの脇をぶると馬体過ぐ

ぐりぐりの夕顔の種蒔きにけり

ぶるぶると顔を震はせ蝌蚪浮上

俳句は直感の詩であるとするならば、耳に入ってきた音声をそのまま表現に使うこともまた個

性である。擬態語もまたモノの本質を捉えている限り意外性があつてインパクトのつよい一句になる。

右に抽いた諸句の表現上の工夫は、それと感じさせずに対象を直感的に消化し読者を一句の世界に導いてくれる。

『ももすずめ』の底流には上質の諧がある。これは自然体で対象に臨むところから生れてくるものである。俳句的にしようというはからいが無いのだ。その諧をしばし愉しんでいるうちに、読者は単なる「諧」ではないことに気がつく。

ピエロにもある素顔に気がつくのである。それは、ときには哀しい表情をする。本書に登場する人間・動物・虫・草花たちはそれぞれそんな表情もどこかにもっている。

『ももすずめ』は「芋虫大にして、角あり、ストライプあり。なかなかダンディー」という蛾の幼虫である。美しい名前は人間のつけたもの。この虫の素顔もまた哀しいものかもしれない。



